

学校における部活動の必要性の一考察

～部活動から作る学校～

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科

教職実践専攻 生徒指導力高度化コース

116033 石原直明

学校における部活動の必要性の一考察

(～部活動から作る学校～)

石原直明

生徒指導力高度化コース

要約：部活動は生徒による自主的な活動であり、中学生・高校生のような心身共に変化する時期の豊富なスポーツ経験は学校生活を豊かにするだけでなく、生涯に渡り豊かな生活を送るためにも必要な経験ができる活動である。その為、本研究では部活動の中でも主に運動部活動について研究を行った。部活動にはどのような生徒が所属し、生徒に対してどのような効果をもたらしているのかを文献から調査し、高等学校では保健・体育の学習指導要領との関係も見ながら、運動部活動は学校生活を豊かにするだけでなく、生涯を豊かに過ごす上で必要な活動であることを明らかにした。また、部活動は教育課程外であるが、学校教育活動の一貫である。そこで、教師が部活動に関わる中で出てくる問題に対して考え、教師への支援の仕方や、部活動への望ましい取り組み方を考察した。

キーワード：学校 スポーツ 部活動 生徒 心 自主性

第一章 はじめに

中学や高校の部活動には人を育てる力があると考えられる。私自身、中学校～大学院まで部活動をする中で多くの事を学んだ。部活動を行う生徒の中には「部活動の活動を楽しんでいる生徒」や「所属している友達とのコミュニケーションを楽しんでいる生徒」の2パターンがあると考えられる。

また、学校の行事などにおいてリーダーとなる生徒の多くは部活動に所属している生徒達であるのではないだろうか。つまり、部活動で得た経験が学校での行事等に生かされているのではないだろうか。学校行事や活動を円滑に、活気のある学校を作る為にも部活動は学校に大きな影響を与える活動の1つになると考えられる。部活動が盛んな学校になれば「学校が荒れる」といった事も抑えられるだろう。

これらのことから、特に運動部活動から学校を作るにはどのようにすれば良いのかを考えて行きたい。

第二章 問題と目的

第一節 問題

運動部活動の基本的意義（保健体育審議会答申）の中には以下のように記されている。

運動部活動は、学校教育活動の一環として行われており、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動である。（保健体育審議会答申 1997）

このように、豊かな学校生活を送る為にも運動部活動は学校教育活動の一環として行われており、学校にとって、生徒にとって必要な活動ではないだろうか。実際、私が中学・高校と部活動を行ってきた経験と、実習を通して感じた事として、部活動をしている生徒は学校行事に対してもリーダーとなる生徒が多いように感じた。

また、生涯に渡って健康で豊かな生活を送る為にスポーツは重要な役割を担うものである。「京都府スポーツ振興計画」（2003）の中には、スポーツ活動を通して克己心やフェアプレーの精神を養い、仲間や指導者との交流を通じて、コミュニケーション能力を育成し、豊かな心や思いやりの心を育てる事ができ、心身のストレスの解消や、多様な価値観を認め合う機会等、青少年の健全育成になくてはならないものとして書かれている。保健・体育学習指導要領では、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する事を目的としている。また、体育の授業を生徒が主体となるものにする為には、部活動で学んだ技術や経験を通して、授業内のリーダーとなり、生徒同士で教え合う事が望ましいのではないだろうか。

学校における指導としては、子どもが体を動かすことの楽しさを感じ、運動を好きにさせるようにし、普段運動しない子に対して限られた時間で効率的に運動量を確保するなどが必要であり、体育の授業を通して運動する事への興味を持たせる事が大切になるだろう。

教員の問題としては、中学校や高等学校においては、スポーツの技術指導を中心にし過ぎたりするなど、楽しく運動させる指導の工夫が不十分であると指摘がなされている。これは部活指導を中心として校務を行っている教員に多く見られるのではないだろうか。部活動を負担であると感じる教員に対しては、学校側が経済的な支援や部活指導を行う為の支援方法を考える必要があるのではないか。また、労働時間の面でも、部活動を持つことによって残業が多くなると考えられる。

第二節 目的

本研究では、中学生・高校生の部活動と教師の問題や教師に対する支援について考察を行う。中学生と高校生の部活動をしている生徒は学校生活をどのように過ごしているのかを文献や先行研究を調査し、部活動が生徒に与える影響を明らかにする。また、教師の労働時間とそれに対する支援の問題や部活指導の問題についても文献や先行研究を調査し、教師は部活動に対して、どのように接していくのが望ましいのかを明らかにしていく。

第三章 生徒にとっての部活動

第一節 部活動に所属する生徒の特徴

部活動に参加している生徒の中には「部活動に熱心に取り組んでいる生徒」や「友達との交流を楽しむ生徒」の2パターンがあると考えられる。西島（2006）らは部活動に熱中している生徒は学校生活にはどのように取り組んでいるのかを中学2年生（1都6県）、高校2年生（1都2県）にアンケート、インタビュー、観察を行った。図1を見てみると、部活動に熱心に取り組んでいる生徒は中学生で65%、高校生で50%となっており、中学生の方が高校生より部活動に熱心に取り組む生徒が多いと言う結果が出ている。部活動に熱心に取り組んでいる生徒の学校の部活動以外の場面への取り組みを見てみると、部活動に熱心でない生徒に比べて学校行事等の場面において熱心に取り組んでいるということが調査内容から明らかになっている。

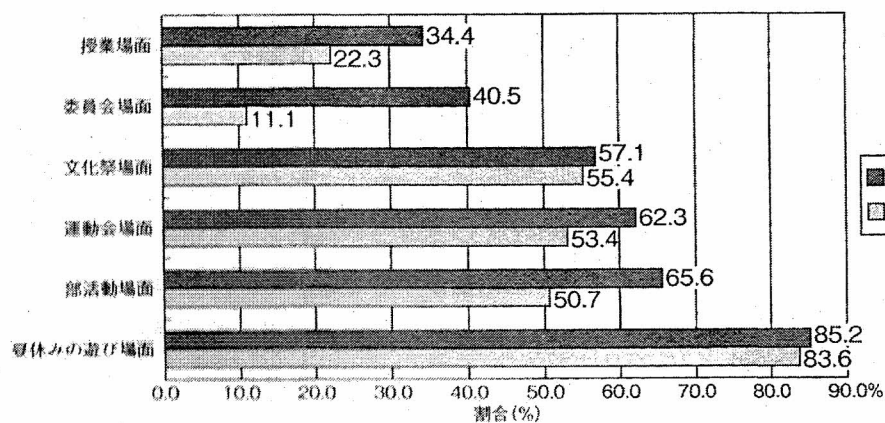


図1 学校の各場面に対する取り組み（部活動-その現状とこれからのあり方- 2006）

次に「部活動に熱心な生徒」「中学生全体・高校生全体」「部活動に熱心でない生徒」について、部活動場面以外の各場面での取り組み方を図2・図3に示した。中学生・高校生共に部活動に熱心な生徒が部活動以外の各場面への取り組み方の数値が高いということが分かる。これに対して、部活動に熱心でない生徒は部活動以外の場面において最も低い数値が出ている。このような点から、部活動に熱心に取り組む生徒は、各場面において熱心に取り組む傾向にあることが分かる。

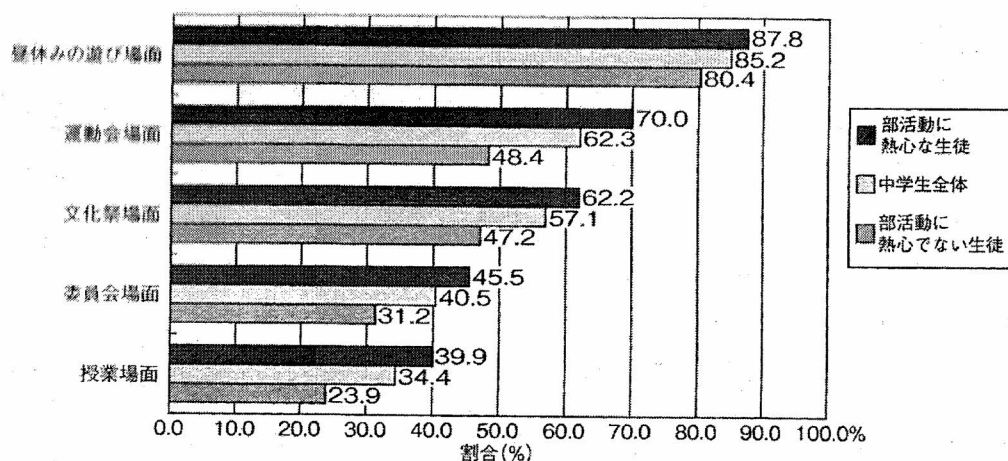


図2 中学生：部活動以外の場面へ取り組み（部活動-その現状とこれからのあり方- 2006）

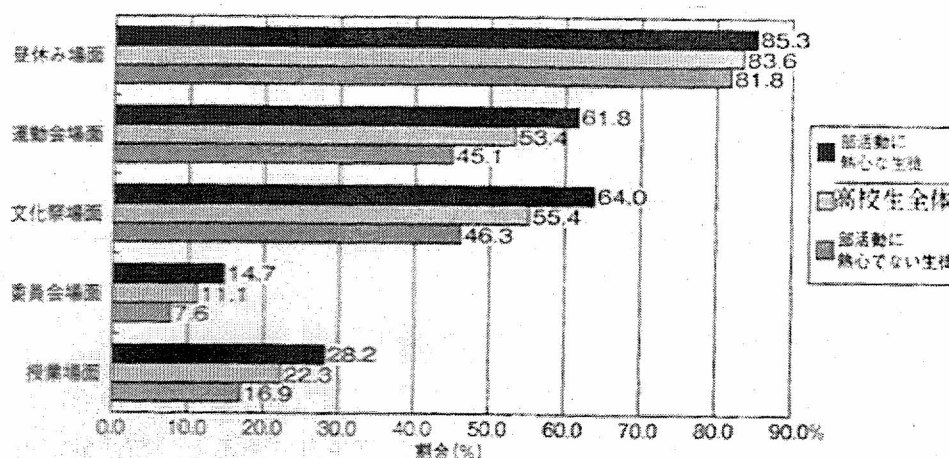


図3 高校生：部活動以外の場面へ取り組み (部活動-その現状とこれからのあり方- 2006)

しかし、部活動に熱心な生徒には部活動以外の場面にも積極的に活動する生徒が多いが、全員がそういう分けではない。中学生では、部活動と同じように学校生活全般に積極的に取り組む生徒や、部活動には熱心だが、授業や委員会にはあまり興味を示さない生徒の大きく分けて2つのパターンに分けられている。前者の生徒は部活動を通して学んだ経験を学校生活に生かす事ができており、学校生活を楽しんでいる生徒が多いのではないだろうか。後者の生徒は部活動をする為に学校に来ているのではないだろうか。高校生では、授業にはあまり興味を示さないが部活動と行事には熱心な生徒、部活動以外には授業と文化祭に熱心な生徒、部活動をする為に学校に来ている生徒の3パターンに分けられていた。

また、部活動には人間性を養う事ができる場にもなると考えられる。部活動に所属している生徒の中には先輩・同学年・後輩が同じ活動を行っている。その中で作られる礼儀や言葉使いなどを学び、同じ目標・目的に向かって協力して活動していくという事は、社会性を身につける事に繋がるだろう。「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」(文部科学省 1997)の中では運動部活動で「生きる力」を育てる事ができると考察されている。

西島(2006)らが行った調査結果の中には、部活動の仲間を大切にする生徒の方がクラスメイトを大切にする生徒よりも、校則を守る生徒は増えるという事が出ていた。また、中学生よりも高校生の方が校則をきちんと守ると答えている生徒の数の差が大きくなっている。中学生より高校生の方が部活動をより本格的に行うようになり、部活動に熱中しだす生徒が増える事で部活動を通して培われる「ルールを守る」という意識が強くなり、これが学校生活へと反映されているのではないだろうか。こういった規範意識という側面は部活動を通して、集団で同じ目標に向かって取り組む事でより高められると思われる。

第二節 部活動が生徒に与える効果

現在、多くの生徒の部活動やスポーツにたいする考え方は、「勝利志向」から「楽しみ志向」へと変化してきているとされている。これに対し、教師の考えが「勝利志向」のままでは生徒と教師の間に意識のずれが生じてしまい、部活動が上手く機能しないだろう。部活動の主体は生徒で

ある為、生徒が部活動に魅力を感じるようにできる限り意見を取り入れ、自主的に参加し活動できるように教師はサポートする必要があるのではないだろうか。

「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」（文部科学省 1997）2章の考察の中では、運動部活動は生徒の為になっているだけでなく、学校の活性化にもつながっている事が書かれている。生徒が主体として活動する為に教師を始め、学校が支援する事で学校への信頼感を高めることができ、明るく充実した学校生活も展開できる。また、生徒の成長できる場の提供は、教員にとっても生徒理解を深めるための重要な機会である。

1997年に文部科学省が行ったアンケートの内容で、生徒（運動部員）に対し「運動部活動の在り方はどうあるべきだと思うか」と言う質問を行なったところ、中学生 56.5%、高校生 62.6%以上の生徒が「ある程度勝つことを中心にしながら楽しむことがよい」と答え、中学生で 21.2%、高校生で 18.8%の生徒が「みんなで楽しむことを中心とし、できれば勝つという形がよい」と答えている。「厳しく徹底して勝つことを目指すべきである」と答えた生徒は中学生 11.8%、高校生 12.1%と少なく、この結果を見ても勝つことが全てでは無く、「楽しむ」という事も考えながら活動を行なっている事が分かる。しかし、「所属している運動部は何を目指して活動していると思うか」と言う質問に対して、中学生 55.9%、高校生 51.5%の生徒が「どちらかといえば勝つことを目指している」と答えており、中学生 22.8%、高校生 26.4%の生徒が「厳しく徹底して勝つことを目指している」と答えている事が分かった。中学校では運動部に所属する生徒全体で 83.4%、高校生では運動部に所属する生徒全体で 83.8%の生徒が「楽しい」と答えている。

表1は、自分が所属している運動部には意見が反映されているのかを聞いたものである。

表1 ※ 生徒の意見の反映状況（文部科学省 1997）

	中学校	高等学校
反映されている	75.4%	82.0%
よく反映されている	12.4	21.6
ある程度は反映されている	35.2	38.2
少しは反映されている	27.8	22.2
反映されていない	24.7	18.0
ほとんど反映されていない	15.0	11.9
全く反映されていない	9.6	6.1

運動部に所属している生徒に対して「所属している運動部の練習や試合に生徒の意見は反映されていると思うか」と言う質問に対しては中学生で 75.4%、高校生で 82.0%の生徒が「反映されている」と答えている。自分達の意見を反映されて、初めてやり甲斐を感じる事ができるのではないだろうか。やり甲斐を感じる部活動でなければ自主的・自発的に活動する事は難しく、教育的な活動としては効果があまり無いだろう。

教師は中学生・高校生が自発的・自主的に活動を組織し展開することができるように、個々の生徒の個性を把握し、生徒の意見を部活動にできる限り反映し、可能な限り生徒で運営していく

ことができれば、「生きる力」の育成ができる。生徒自身が自分たちで考え、部活動を通して仲間と協力し、成し遂げて得られた自信や達成感等の経験は学校生活や学校行事のリーダーとなって積極的に取り組む為の自信に変わり、学校行事や授業等、リーダーシップを発揮できる分野で活躍し、学校生活は充実したものになるだろう。

部活動は、授業では学ぶ事のできない社会性や協調性を、興味のある活動や様々な人との交流を通して身をもって感じる為に大切な活動の1つであり、「心の教育」という点において、中学生・高校生共に大切な活動であると考えられる。

第三節 中学生の部活動と高校生の部活動

中学生の時期は身体の発達が子供から大人へと変化する時期である。また身体だけでなく精神的にも変化が見られ、人間形成を行う上で大切な時期である。青森県でも2008年に出された中学校期の運動部活動の基本的意義の中で、中学生期の豊富なスポーツ経験は、スポーツの意義や特性などに関する理解を一層深め、楽しさを経験すると述べられている。つまり、その経験が今後の豊かな生活を送る上で必要なスポーツ習慣の形成に大きな影響を及ぼすと言われているのである。学校教育活動の一貫として運動部活動は、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い技能や記録に挑戦する中で楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動であると言われている。さらに運動部活動は、生涯にわたってスポーツに親しむ資質や能力を育て、体力の向上や健康の増進を図る事ができ、学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、自主性や協調性、責任感や連帯感などを育成し、仲間や教師（顧問）との密接な触れ合いの場として大きな意義を有するものである。心身共に変化するこの時期の豊富なスポーツ経験は、心を育て、学校生活を豊かにし、豊かな生活を送るためにも必要である。

次に高校生の部活動について考えてみる。高校生に対しての部活動は自主的に行う事が大切であると言われているが、インターハイや甲子園等に向かって教師の過度の練習による「勝利志向」が目立つように感じられる。

現行の保健・体育学習指導要領の中にある指導目的では“生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する”ことが掲げられている。学習指導要領総則の中にある体育・健康に関する指導（第1章第1款の3）では、特別活動や運動部活動などの教育課程外の学校教育活動などを相互に関連させながら、学校教育活動全体として効果的に取り組むことが求められている。しかし、実態としては競技力の向上が重視されており、勝つことを意識して、活動を行うとその方針について行けずにやめてしまう生徒や、バーンアウトにより、高校卒業後にはその運動をやめてしまう生徒がいる。2節でも述べたように生徒の部活動への考えが「勝利志向」から「楽しみ志向」に変化していることも関係しているのではないだろうか。高校生の部活動は小・中学校からの延長で続ける生徒も多く、高校生の時期に部活動で学んだ事は将来、豊かな生活を送る上での基礎となる為、生徒が興味を持って自主的な活動になるように組織し、活動している競技を楽しみと感じられるようにする必要があるだろう。

文部科学省が行った「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」（文部科学省 1997）の第

2章では中学生と高校生の活動日数について平成8年の調査結果から運動部における休養日等の設定例をあげており、望ましい活動日数や時間を考察している。運動部に所属している中学生に対し、適当と考える学期中の活動日数と活動時間では週5日・活動時間数2～3時間、高校生で週6日・2～3時間であり、休日の活動時間でも長くて3～4時間が望ましいとされている。

運動部における休養日等の設定例(参考) 文部科学省(1997) 表2

- ・中学校の運動部では、学期中は週当たり2日以上休養日を設定。
- ・高等学校の運動部では、学期中は週当たり1日以上休養日を設定。
- ・練習試合や大会への参加など休業土曜日や日曜日に活動する必要がある場合は、休養日を他の曜日で確保。
- ・休業土曜日や日曜日の活動については、子供の[ゆとり]を確保し、家族や部員以外の友達、地域の人々などより触れ合えるようにするという学校週5日制の趣旨に適切に配慮。
- ・長期休業中の活動については、上記の学期中の休養日の設定に準じた扱いを行うとともに、ある程度長期のまとまった休養日を設け、生徒に十分な休養を与える。
- ・なお、効率的な練習を行い、長くても平日は2～3時間程度以内、休業土曜日や日曜日に実施する場合でも3～4時間程度以内で練習を終えることを目安とする。長期休業中の練習についても、これに準ずる。

この日数が適当だと考えられた背景には中学生・高校生の意見や保護者・顧問教師の意見がある。中学生に比べて高校生の方が専門的に活動しており、発達の段階を考えるとこのような休養日の設定になるのではないだろうか。運動部活動の意義の実現を考えると、少ない活動日数・時間というのは望ましくないとされているが、スポーツ障害やバーンアウトを防ぎ、心にゆとりを持たせる為のバランスの取れた生活を目指すのであれば、行き過ぎた指導は望ましくない。生徒の意見に耳を傾け、保護者、教師の意見を踏まえて、適切な休養を確保する事が大切である。

第四章 教師と部活動

教師にとって部活動は教育課程外であり、部活動の指導に対して熱心に取り組む教師や、ボランティア感覚の教師、仕方なく部活指導を行なっている教師と、教師によって様々な関わり方をしている。教師によって部活動への意識が違えば、同じ学校内の部活動にも温度差が生じ、学校全体で部活動を活発にし、学校を明るくするものへとしようというのは難しくなってくるだろう。部活指導は勤務時間を終えてからとなり、部活指導を終えてから、校務の仕事が始める。また、土日の休日を削っての指導により自分達の時間を作れない為、ゆとりのない生活をしており、教材研究もしっかりとできないといった声も出ている事から、部活指導を行う教師にも様々な姿勢が見られるのではないだろうか。

休日手当などに支援が低いという問題に対し、平成20年10月からはメリハリのある教員給与体系の実現の為、部活動手当を含む教員特殊業務手当の増額が行われた事が「問われている部活動の在り方」(関 2009)の中で書かれていた。増額が行われていても、土日4時間で2,400円と時給に換算すればわずか600円という金額であり、かなりの部分を教師が負担しているのが現状である。

部活動の教育的意義を認めるのであれば、他の特に困難な業務に対する手当との兼ね合いを測りつつ、最低賃金並の水準にまで引き上げ、「休日4時間以上」、「休日8時間以上」に支給という制度を、1時間以上から1時間単位で支給できるよう制度変更すべきだろう。

次に顧問教師への支援を考えてみる。部活動を持つにあたって、活動経験の無い部活動を持つ場合もある。そういった場合、学校としては外部指導員を呼んで教師は部の運営を中心に行うというケースがある。しかし、外部指導員に任せきりになってしまってはならない。生徒を多面的に見る為には教師も積極的に部活動に参加し、生徒と活動を共にする中で部活動でしか見せない生徒の一面を見ることが大切である。部活動は教育課程外ではあるが、学校教育活動の1つでもあり、生徒にとって部活動でしか得られない経験は多くある。第1章の中にも述べてきたが、部活動を熱心に取り組む生徒の多くは学校生活にも熱心に取り組み、授業や行事に対してリーダー的存在となって活動を行う生徒もいる。外部指導員を活用するのであれば、技術的な面は専門的な知識のある外部指導員に任せ、精神面等に関しては顧問教師が指導していく等、学校生活と部活動が離れてしまわないように顧問は接していく必要がある。これが生徒にとっても学校にとっても充実した部活動に繋がるのではないだろうか。

「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書(文部科学省 1997)」には教師の部活動の指導目標で最も多かったのは「協調性や社会性を身につけさせる」であり、中学生で44%、高校生で42%であった(表3)。教育的な活動として部活動を行うのであれば、スポーツ活動を通して社会性や協調性を学ぶ事を目的に行うのか、自主的に活動を行えるように学習させる事を目的にするのか、何を部活動で学ばせたいのかを明確にする必要があるだろう。部活動を通して目的・目標を持って競技をする上で学ぶ集団での活動の大切さ、問題解決力の向上、自主的な活動を通して得られる自信や達成感を味わう事ができれば、学校生活や学校行事の面で部活動を通して学んだ事を生かし、行事の成功という目標に向かって活動していけるだろう。調査内容の中において、中学生と高校生の顧問教師の指導目標に大きな差が出たのが「競技力を向上し大会で少しでも良い成績をおさめる」であり、中学生で20.7%、高校生で33.2%と10%以上の差が見られた(表3)。ここで大きな差が出た背景としては、高校生ではインターハイや甲子園等、全国で戦う事を目標として取り組んでいる生徒や教師が中学校よりも高等学校の方が多い傾向にあるのではないだろうか。

表3 *指導の目標(運動部顧問) (文部科学省 1997)

	中学校	高等学校
協調性や社会性を身につけさせる	44.0%	42.0%
将来にわたってスポーツに親しむ態度を育てる	36.8	31.7
精神力や責任感を育てる	31.9	30.5
競技力を向上し大会で少しでも良い成績をおさめる	20.7	33.2
明るく楽しんで仲間と活動させる	25.6	20.2
体を鍛え将来活力ある生活ができるようにする	24.4	20.6
特にない	1.4	2.1

(最大2つまで回答可)

また、部活動を持つ教師の中で、「熱心すぎる顧問」の問題や部活動の私物化、部活動への逃避が発生しているという事も、部活動改革-生徒主体への道-(内海 1998)の中で述べられている。部活動での「成果」が教師に対しての大きな評価になっているようである。あまり持ちたがらない部活動の顧問を臨時採用教師に担当させ、県大会等への「成果」で本採用の点数としたり、教師の異動では部活動が持てるかどうか校長として大きな関心事となっており、県大会や全国大会へ導いた教師は引く手数多であるとされている。また、週7日、6日を部活動に費やす教師の授業は共通して評判が良くないとされている。その背景には部活動指導に力を入れすぎて、教材研究や授業研究などが出来ないからである。教師は生徒の意見を部活動にできる限り反映させる必要がある。現代の子ども達は「勝利志向」から「楽しみ志向」に変わって来ている。しかし、教師が勝つ事を目標に活動を行ない、生徒がこの方針に満足できなければ、生徒主体の活動になるのは難しいのではないだろうか。

部活動はプロスポーツでは無い。教師の一番の仕事は授業であり、部活動のみに力を入れていては本来の教師の在るべき姿が無くなるのではないだろうか。確かに、勝つ中で得られる経験は多いだろう。しかし、勝利至上主義の指導では過度のトレーニングによる健康の損害も考えられる。これでは学校教育活動としては成り立たないのではないだろうか。

第五章 考察

生徒たちは部活動を行う上で様々な経験をし、学校生活を充実させているようである。生徒たちは部活動を通して豊かな心を養い、社会性・協調性を身に付け、将来、豊かな生活をして行く為の経験や生きる力を身につける事ができるようである。学年や学級を超えた仲間と共に認め合い、協力し合い、高め合いながら活動する事で、目標に向かって自主的・自発的に活動を行う事が部活動ではできるようである。その中で友情や連帯感等を高め、チームとしての目標を明確にする事によって、自己の役割を部活動の中で見つけ、責任を持って活動に取り組んでいる事が見えてきた。自分の役割を見つめる事ができれば、その役割を果たす為にどのようにすれば良いのかを考え、学び、判断し、行動する事ができ、失敗すればなぜ失敗したのかを考えさせる事によって問題解決能力を身に付けることができるだろう。仲間と一緒に目標に向かって活動に取り組んだ事は、生徒たちの中で大きな自信や困難を乗り越えていく為の力になり、学校生活の中にも生かされてくるだろう。

第3章の中でも述べてきたが、部活動に熱心に取り組む生徒は学校生活にも熱心に取り組む姿勢が見られている。部活動で仲間と協力して目標に向かって活動した事やそれにより得られた達成感、責任を果たす事の大切さ等の経験を通して、今度は部活動だけでなく、行事でも「勝ちたい」「成功させたい」という気持ちになるのではないだろうか。部活動を通しての経験が、体育や体育祭など、自分が主役となれる所でリーダーシップとして発揮される。ここで自分が部活動で得た知識等を生かし、生徒同士で教え合う事ができれば、生徒を主体とした活動ができる。そうなれば、部活動と授業や部活動と学校行事の良い関係が作れるようになり、学校にとっても部活

動は重要な役割を担うだろう。

部活動は、努力や忍耐、スポーツマンシップ、思いやり、集団生活のルール等を身に付ける場となる。部活動を通しての規範意識が学校生活の中にも生かされている事が第3章の過去の調査研究から明らかになった。部活動を熱心に行う中で集団で活動しているという意識が生まれ、集団生活の中でルールを守る事が当たり前になってくるのではないか。学校生活の中にも校則というものがあり、部活動と同じくルールがある。部活動に対して熱心に取り組み、活動が本格的になってくる中で仲間意識が強くなれば、自然とルールを守るという力が身に付くのだろう。中学生よりも高校生の方が校則を守る傾向にあるという点から考えてみると、高校では中学よりも活動がより専門的になり、本格的になる。その背景にインターハイや甲子園等、高校生が全国で活躍できる場があり、その大会への出場を目標に活動を行っている事がある。その為、高校生では熱心に部活動に取り組む生徒が多くなり、それに比例して校則を守る生徒が増えているのではないか。

次に教師と部活動の関わりである。教師にとって部活動は教育課程外の活動であり、同じ学校に勤務する教師でも、ボランティア感覚の教師や部活指導をする為に学校に来ている教師等、部活動に対して温度差がある。部活動は教育課程外ではあるものの、学校教育活動の1つでもあり、学校をアピールする際にも関わってくる活動である。生徒は部活動の経験を通して学ぶ事も多く、部活動で進路を決める生徒もいる。このような点を考えると、部活指導にも力を入れる事が大切である。しかし、部活指導に取り組むにも教師の部活動への意識の問題や、時間的な問題、部活指導を行う教師への支援の問題等、いくつかの問題がある。部活指導を行う事によって、教師の自由な時間は減り、精神的にも大きな負担になる場合がある。さらに、他の業務や休日を削っての活動にも関わらず、教師への経済的な支援は充実しておらず、かなりの部分を教師が負担している状態である。教師にも家庭があり、このような状況では満足に部活指導はできないだろう。

活動経験の無い部活動を持つ教師にとっての支援として外部指導員を呼ぶなど、教師の負担を減らし、部活指導の充実の為に必要な支援をする事も大切である。しかし、外部指導員に任せきりになってしまってはならない。外部指導員には部活動の方針を理解してもらい、役割分担をしながら顧問教師と協力して活動を行っていく必要があるだろう。

熱心すぎる指導にも問題がある。過度のトレーニングや部活指導ばかりに力を入れ、教材研究が疎かになり授業ができないというのでは教師という仕事は務まらない。教師の1番の仕事は授業であり、教育活動を行う事である。部活動はプロスポーツでは無く、教育活動の1つであるという事を理解しておかなくてはならない。「勝つ」という事で得られる物は多いが、「勝つ」という事のみを考えた部活動では生徒のバーンアウトや、体を壊す原因になってしまう為「心の教育」を行う事ができない。

部活動は学校教育活動として教育課程との連携が望ましいとされており、現行の保健・体育学習指導要領では、“生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する”ことを重視している。このことから、部活動と体育の連携や生徒の「豊かな心」の育成を行う為には、「勝つ」事を目指した過度のトレーニング等、熱心過ぎる部活指導は良くないと考えられる。部活動は社会性や協調性を学ぶ場であり、ここで学んだ事を生かして授業や行事を行う事が学校と

しても望ましい形である。

学校にとって部活動は必要な教育活動の1つである。部活動を熱心に行う生徒が増えれば、学校生活にも熱心に取り組む生徒や校則等を守る生徒が増える事が明らかになっている。この点から、部活動の活性化は学校の活性化に繋がると考えられる。管理職は教師に対してやる気が出るように支援の方法や経済的な補助、部活顧問の配置をし、教師は部活動を生徒の自主的な活動にできるようにできる限り生徒の意見を取り入れながら活動ができるように環境を作る必要があるだろう。特に、部活動は自主的な活動であるという点から、自分たちで目標を立て、その目標に向かって集団で活動する事が望ましい。そして、自分たちで立てた目標に対してどのように行動をすれば達成できるのかを考えて活動を行う事で生徒たちの部活動に対する取り組み方や、学校生活に変化が見られると考える。

第六章 研究の成果と今後の課題

・今回行った研究から、部活動では授業で学ぶ事ができない経験をする事で、その経験を生かして学校生活を豊かにしている事が明らかになった。また、人間性・社会性等を自然と身につける事ができ、教育活動として学校にとって必要な活動である事が分かった。

しかし、文献を調べている中で、部活動が盛んではないと学校が荒れないという関係性が見つからなかった。本研究の中にある部活動に熱心な生徒は校則を守る生徒が多いという観点から見ると、部活動が盛んな学校では「荒れる」といった事を自然に抑えられるのではないだろうか。今後、学校現場に出ていく中で、その実際を見ていきたい。

引用・参考文献

- ・ 青森県教育委員会（2008）「スポーツ活動の指針」青森県教育委員会HPより
- ・ 保健体育審議会答申（1997）「生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について」文部科学省HPより
- ・ 石田晴彦・亀山恵介（2006）「中学校の部活動が学習意欲に及ぼす影響-部活動集団の特徴と部活動への意欲に着目して-」愛知教育大学教育実践総合センター紀要 第9号
- ・ 岩波書店編集部（2009）「部活魂！」岩波書店
- ・ 加藤史子（2004）「メンタルトレーニングで世界が変わる」図書文化社
- ・ 京都府教育委員会（2003）「京都府スポーツ振興計画」
- ・ 森川貞夫・遠藤節昭（1989）「必携 スポーツ部活動ハンドブック」大修館書店
- ・ 文部科学省（1997）「運動部活動の在り方に関する調査研究報告書」文部科学省HPより
- ・ 文部科学省（2010）高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編 東山書房 pp. 3
- ・ 文部科学省（2002）「子どもの体力向上のための総合的な方策について（答申）」文部科学省HPより
- ・ 文部科学省（1998）「我が国の文教施策」大蔵省印刷局
- ・ 西島 央 編著（2006）「部活動 その現状とこれからのあり方」学事出版 pp. 36
- ・ 関 喜比古（2009）「問われている部活動の在り方～新学習指導要領における部活動の位置付け～」立法と調査No. 294
- ・ 染谷 幸二（2009）「部活で生徒と絆をつくる」明治図書出版
- ・ 内海和雄（1998）「部活動改革-生徒主体への道-」不昧堂出版
- ・ 山口県教育委員会（2011）「よりよい生徒指導に向けて 第Ⅱ章 場面指導事例【部活動編】」山口県教育委員会HPより